

2018年12月22日、今期より各地域において開催されることになった「地方学術会議」の第1回目として、日本学術会議 in 京都が、京都府歴彩館、京都府立大学キャンパスにおいて開催された。

京都歴彩館には、井手亜里京都大学名誉教授が開発した超高精細スキャンニング技術による複製、幅約7メートルの金屏風「二条城行幸屏風図」が設置され、来場者の目を楽しませてくれた。

歴彩館大ホールで開催された第一部「伝統文化と科学・学術の新たな出会い」では、山極寿一日本学術会議会長、実行委員長の山田啓二京都産業大学教授（前京都知事）の挨拶に続き、山極会長と土佐尚子京都大学大学院創造生存学館教授の対談「伝統芸術と科学」が行われた。「見えないものを見せるのが芸術」と語る山極会長と、動物やスポーツ選手の声を、デジタル技術で流動的にヴィジュアル化し表現する土佐教授の映像美は、テーマにぴったりの対談となった。続く、中津良平京都大学デザイン学リーディング大学院教授の講演「アジア化する世界」では、現在のAIの時代、情報環境の変化が人間の感性を変えつつあること、そこに論理的思考を軸にする西洋社会とは異なるアジアの知の可能性があることが、わかりやすく説明された。第一部の最後は、渡辺美代子日本学術会議副会長と地元京都の華道家元池坊専好さんとの対談が行われた。女性として初めて家元を継承された専好さんは、「枯れた花にも華がある」と語り、単に効率や生産性にこだわらない世界との向き合い方に、話がはずんだ。



会場をお隣の京都府立大学のキャンパスに移して行われた第二部では、「京都市民にとっての科学・学術」、「伝統文化と科学・技術・リベラルアーツ」「先端産業と科学・学術」、「若手研究者は科学・学術について何を考えているのか」の

四つの分科会が開催された。第一分科会では、坂東昌子 NPO 法人あいんしゅたいん理事長の司会で、佐藤文隆京都大学名誉教授から中学生の天羽悠月さんまで、世代を超えた議論が活発に行われた。第二分科会では、佐藤洋一郎京都府立大学教授のコーディネートで、京都の和菓子について、その歴史と技術をめぐって、講演とともに和菓子職人さんの実演も行われ、その技の見事さに多くの参加者は驚きの声をあげていた。第三分科会では、京都高度技術研究所理事長の西本清一京都大学名誉教授を軸に、地元の産業界のリーダーと研究者の間で、伝統文化があふれる京都で、明治維新以後いち早く新たな科学技術を取り入れた精神が、いまだ息づいている京都の特徴について議論が進んだ。また若手アカデミーのメンバーを中心に組織された第四分科会では、新福洋子若手アカデミー副代表を中心に、若手研究者の本音が語られるとともに、会場参加者の積極的な参加も含めて熱心な議論がもたれた。

宮野公樹京都大学融合教育研究推進センター准教授の企画で進められた第三部「あなたの得意は誰かの不得意。GIVE & TAKE でさくっと協働（コラボ）」では、あらかじめ公募された研究者や産業界からのメッセージ「私の関心」「今困っていること」「提供できる技術や知識」のマッチングが、ポスター展示を通じて行われた。約100件のメッセージを前に、参加者同士の会話もはずみ、狙い通りの「協働」の機会となった（このデータをもとに、電子メールを通じて、マッチングとその後のやりとりの継続も進められている）。

今回の会議は、近畿地区会議の京都在住のメンバーを軸に準備された。お互いのネットワークを雪だるま式に拡大することで一〇人ほどのメンバーからなる企画委員会が組織され、企画・運営の体制が作られていった。企画委員会のなかで、思わぬアイデアが生まれ、それがメンバーのもっている多様なネットワークとつながることで、さまざまな分野から多くの方に参加していただくことができたと思う。事務局を担っていただいた京都産業大学学長室の職員の方々を含めて、会議を支えていただいたみなさんに心から感謝したいと思います。